

第2章 高松藩時代

慶長	19	一〇月二五日大地震	承応	3	夏大旱 秋大雨洪水 五穀実らず飢饉
寛永	2	一月上旬四国中国大地震			冬から翌夏まで施米賑恤 牛馬餓死数千頭
	3	閏四月七日大暴風雨			藩金六〇貫貸与 毎三、四戸牛一頭を飼わす
	20	以来九五日降雨なし餓死多し			貢米減少 (注)この時長尾西村年貢一〇分の
		四月下旬より六月下旬まで降雨なし			一・五に減ず 極楽寺住桂洞法印雨を祈る
		秋から冬にかけ餓死多く一〇分の一に及ぶ			午歳の大旱という
長尾		西村年貢三分の一に減	万治	3	五月大水

第一三節 災 害

藩政時代の  
讃岐の災害

われわれの先祖は長い過去の歴史においていくたびか天災地変に遭遇し、つぶさに辛酸をなめ、あるいはそれを克服してきた。上古以来の災害をあげればきりがながないが、本章ではその記録に確実性があり、かつ身近な時代のものとして、藩政時代の災害について述べる。しかし、長尾地区においてそれがどのような徴するに足る資料はきわめて乏しい。ただわずかに寛永一九年から寛文四年にわたる長尾西村の免定と、寛永五年から享保二年にわたる奥山村の免定によって藩政時代初期の風水害の状況を推察し、あるいは藩政後期の庄屋記録または古老の伝承によって、後期ごろの災害の一端を知るのみである。しかしこれらの災害は、長尾地区の局部に限定されるものではなく、広く讃岐全般に共通するところが多い。そこで、『讃岐国大日記』や『高松藩記』、その他の資料により讃岐の災害を抜抄し数少ない郷土の資料を追記してその状況を推察してみたいと思う。



寛政	天明	安永	享和				
元 2	5 2	2 9	11 7				
4 3	8 5 3	7 6	8 5 4 元 元				
大早ばつ 蝗害 五穀稔らず 米五千五百石貸与 八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	一〇月二〇日二日洪水堤防破壊 八月一九日大風洪水 昨年より早ばつ一六三日雨なし賃租三万石減 賑恤 六月から八月大旱三万石余の地半作 翌八年迄莫大な米銀を出し賑恤 八月廿、廿一日大風洪水 家崩壊一万九千余 戸 賃租数万石減 金穀を出し救助 春より秋疫病流行 春夏大疫人多く死す 飢饉 八月廿一日大雨洪水 麻疹流行 五月四、五日大風雨 冠水田数千町 民家崩壊流失二二三 五月より六月雨降り続き大洪水 七月九日大風雨 八月二〇日大風 飢饉 大風洪水 五月一四日より六月廿一日まで雨降り続き大 洪水 大地震 大早ばつ	七月二日大風洪水 秋旱 蝗害 八月一九日大風洪水 洪水 麻疹大流行(庵原氏記録) 六、七月旱 九月二日大風雨 寒川郡旋風民家損傷死人七 夏旱 六月廿九日大風洪水 飢饉 藩より賑恤 六月より八月大旱 五月より七月大旱 八月六日大風洪水 八月三、四日大風洪水 五月より七月大旱 九月九日大風雨人馬多く死す 夏より秋雨降らず 大いに租税減 六月廿七日大風雨 七月廿九日晦日 八月八日大洪水 五月より七月大旱 五月廿一日 六月六日共に大風洪水 七月一七日大風洪水 六月より八月大旱 八月大風雨 八月七日大風洪水 閏七月六日大風洪水 穀物登らず飢饉	文政	天保	万延	文久	慶応
元 2	元 2	元 2	元 2	元 2	元 2	元 2	
3 4	5 6	7 8	9 10	11 12	13 14	15 16	
八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	八月二〇日大風雨 七月廿六、七日大風雨 九月八日また大風雨 転家多	

弘化	嘉永	安政	文久	慶応
12 4	2 3	6 3	元 2	元 2
10 4	12 4	6 3	元 2	元 2
八月九日大風洪水 八月九日大風洪水 七月一三、四日大風洪水 七月一〇、一日大風洪水 九月二日大風洪水 蝗害 五月より八月大旱 六月一五日日地震 一月四、五日大地震 人家倒壊三千 余震やまず土民草庵を造り避 難一〇数日 金穀を土民に賜う 長尾町西大家痛み多し(庄屋記録) 竹藪に避難した者多し(伝承) 七月朔日廿九日 八月廿日共に大風雨 七月朔日大風洪水 七月朔日大風洪水 九月コレラ病大流行 死者頗る多し	二月廿三日地震 七月一日大風雨 霖雨のため五穀登らず 飢饉 粟三千三百石賑恤 四月より七月麻疹流行 七月四日大風雨 七月一四日大風雨洪水 七月麻疹流行 長尾 は幸にして免かれる お礼として白鳥参詣(小 西文書) 八月七、八日大風洪水 八月七、八日大風洪水 寅年の大水といって 有名 八月一日より降り始め七日より八日に かけ大暴風雨 堤防各処で決潰 非常の凶荒米価著しく騰貴一石一貫目(銀)に 迫る 農民ら山野の草根・木実をとる(富田 小治革史)			

安政五年 (一八五八) 高松城下西浜ぎこ場よりコロリという病気が発生し、高松城下で二千人、  
 ころりの流行 郷中でも盛んに流行した。これについての風説は、毒薬を井戸に投げ込んだという者、きつね  
 やたぬぎのしわざという者、キリシタンのしわざという者などいろいろあった。一夜にしてコロリと参るので  
 のような名をつけた。藩では石清尾神社に悪疫退散を祈った。これについて次のような意味の達しが、こちらの  
 村々にも回っている。

諸国一統にどんころりと申す病気がはやり死人があまた出ているが、先日徳島表で怪しい者をきびしく吟味し

たところ、日本中の飲み水に毒を流し入れ、諸人を皆殺しにしてくれと頼まれたので、阿波に七人、そのほかへあまた入り込んだ由自状した。だれに頼まれたか白状しないので牢に入れてある。このことを徳島から通達してきたので、飲み水はもちろん、いかがわしい旅人はちよつとの立ち宿もさせないよう注意せよ。

これは、安政五年九月五日寒川郡兩大庄屋が出したものである。安政五年のコレラは当時日本中に流行したものであるが、未知のため怪しい者のしわざと信じていたことがわかる。

**安政の大地震** 安政元年（一八五四）六月一〇日および一五日に地震があり、一月四・五日にはこれまた前代未聞の大地震に見舞われた。長尾の古老の伝承によると、ふらついて道が歩けず、たまり水、便所のため肥

が踊り、人々は余震をさけて竹やぶに避難し、数日野宿したという。八幡池の堤防欠潰して水溜できず。富田有馬右衛門三郎が藩へ報告した控えに、「志度浦津田浦大痛みだが山分はゆるやか」となっており、日記には、「前代未聞の大地震、富者は災宅を構え貧者は急ごしらえの小屋を造つて避難した」とある。

**慶応三年の洪水** 八月七、八両日にかけて大風洪水があつた。寅年の洪水といって今に伝えられている。長尾町では鴨部川が各所で決壊し、濁水が村中にあふれ家屋の損害、農作物の被害がおびただしく、人畜に死傷が多かつた。

**長尾西町の大火** 高松藩記にも出ていないし、記録も見当たらないが、安政ごろ長尾西町に大火があつたという。古老の聞き伝えが多いので疑いなかろう。火元は西方で、折からの西風にあおられ、全焼する家が多かつたという。最近西町で家屋建築のため地業を行ったところ地下より多くの焼土・焼かすが出たというからそれを裏づけるものかも知れない。